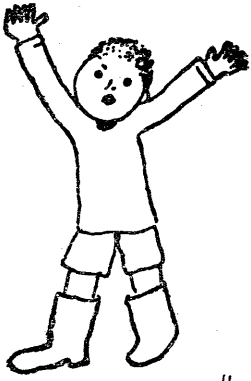
アメリカより帰りて

アメリカの最近の幼児教育と日本の幼児教育の課題

津守　眞



私は、こゝでアメリカの最近の幼児教育のことを考えるに当って先づ私が二年間学んでいたミネソタ大学の児童研究所の附属幼稚園とナースリースクールのことを取り上げ、それから此の大学の所在する市、ミネアポリス市の各種の幼稚園に目を通し、それから家庭における子供の日常生活を観察して、日本の幼児の問題と比較し、両者の問題の相異の根本となっている社会の相違を考察し、日本の幼児教育を一層進めるために、考察の一助として供したいと思う。

ミネソタ大学児童研究所附属幼稚園及びナースリースクール　此の幼稚園は、此の三十年来、アメリカにおける幼児教育界の新教育運動の牙城をなして来たところである。アメリカにも多くはない大学附属の児童研究所に附属した幼稚園としてアメリカにおける幼児教育の指導的役割を果してきたし、又こゝで養成された幼稚園の先生は全国に数多く散らばっている。校長はヂョセフィン・フォスター（Josephine Foster）という女の人で、一九二五年に創立以来校長をしてきたが数年前亡くなった。ヂョセフィン・フォスタは幼稚園教育において古典的な価値を持った名著を数冊著し、今尚幼稚園の先生になる人には必読の書物となっている。（註1）フォスター女史の死後、ドクター・エリザベス・メチャム・フラー（Elizabeth Mecham Fuller）が跡をついで幼稚園及びナースリースクールの校長をし、又大学の教授を兼任している。校長の下に幼稚園、ナースリースクール各々主任保姆があり、何れも創立以来主任保姆をしている。此処は大学の附属なので実習の学生や研究のために入りこむ学生が実に多い。ナースリースクールの二才児の部屋などは時には壁際にぎっしりと大人が立ち並ぶ位のこともある。しかし不思議なことに、そうゆう大人が割に邪魔にならない。研究或いは見学のために参観したい時は、校長の秘書に断わると、参観の注意書を渡してくれる。それには、子供に話しかけない事、とか出来るだけ立たないで腰をかけて壁際に坐るようにとか書いてある。皆これを守るから静粛であるし、子供も余り気にしない。

さて、此処でいくつか日本の幼稚園との印象の相違を挙げてみよう。私が此の大学に来た当初、私は幼稚園がどこにあるのか気が付かなかった。しばらくして私は、私共のいつもいる研究室と同じ建物の中に、それも玄関を入って直ぐの部屋に幼稚園があることを知って驚いたのである。きっちりと閉じた扉と壁は、幼稚園を一切の外界から隔絶して、幼稚園だけの世界を作ってしまう。庭に出る所も、日本の幼稚園の様に開け放しではなくて、明るい窓はあるけれどもすっかり壁に包まれて狭い出入口が一つあるだけである。幼稚園のみならずすべての家屋が、こうゆう風に外界としきっている所は欧米的生活様式と、日本の生活様式との違う所である。夏になると日本では窓も碍子も開けひろげて風を通して涼しくするがアメリカでは逆である。窓も碍子もきっちりしめて、黒いカーテンをおろして陽をさえぎって部屋の中を涼しくしようとする。つまり、自然との関係が薄く生活と四季との関係が少い。幼稚園の保育案でも自然の変化をとり入れた遊びが少く、その点日本は豊かな自然が保育の内容にも盛り込まれているのを感じた。もう一つの印象は先生が大変静かで子供達が秩序正しく、騒がないことである。よく日本の子供達はこんなにうるさくないだろうと尋ねられたものだったが、私にはかえってアメリカの子供達が静かで、秩序がある様に思われた。そして又、先生の存在が目立たない。これは幼稚園教育でいつも強調される事であるが、先生は決して表面に出ないで、子供の活動を助けながら、子供をリードしてゆくという事がうまくいっているのであろう。先生の声が大きく保育室に響くというようなことは殆ど見かけなかったことである。

いろいろの幼稚園

さて、大学附属の幼稚園は、いろいろの点で特殊な幼稚園である。研究者、実習生を多くもち、手が行き届き、子供も教育ある家庭教育に特に熱心な家庭から来ているものが多い。そこで目を転じてミネアポリス市の各種の幼稚園を見ることは、アメリカの幼稚園界の一つの断面を見ることともなろう。

公立幼稚園　日本では公立幼稚園が少く、全国幼稚園の約六〇％が私立であるのに対し、アメリカでは今世紀の始めより、私立幼稚園は急激に公立幼稚園に吸収されてしまった。そして現在では、全国幼稚園の約八〇％が公立小学校に附置された幼稚園であり、ミネアポリス市の八十二の公立小学校の殆ど全てが一つか二つの幼稚園のクラスを持っている。公立小学校は貧困な地域にも裕福な地域にも等しく分布しているから、いろいろの階級の子供が安い費用で公立小学校の幼稚園にゆくことが出来る。私は一日、一番貧困な地域の小学校、アダムス、スクールの幼稚園を訪れてみた。予め、最も貧困な地域だから、と注意されていたのであるが、幼稚園の子供の印象は、全く他の地域と変らず、子供達は明るく嬉々として遊んでいた。公立小学校に附設された幼稚園は、どうしても小学校の子供と同様の取扱いを受けがちである。教室は小学校の他のクラスと隣合って、造作も同じである。たゞ机と椅子が小さく、机が仕事台のように並べられて、人形のおうちなどが部屋の隅にとりつけられてあるだけの違いで、校庭も他の子供と共通である。こうゆうと大変

小学校的な幼稚園の様に思われるかもしれないが、又現に先生によっては、より小学校に近く、或いは、よりナースリースクールに近く指導しているけれども、概して所謂小学校的なかたい感じは受けない。というのは、アメリカでは、幼稚園から小学校の二年までは、初等科として、大体教育の様式も、似ているし、又先生の方も共通することが出来るのである。幼稚園の先生の免状というのはなく、初等科の先生の免状が下りるわけである。それだから幼稚園が小学校に似ているとも云えるし、又小学校が幼稚園に似ているのだとも云える。私が滞在していたころ、丁度日本から子供をつれて滞在に来られた方があり、その子供が小学校の一年に編入されたが、アメリカの小学校は、まるで幼稚園みたいだ、と云っていたのは、此の間の事情を語るものだろう。序でながら、アメリカでは大がいの幼稚園は午前と午後と二部制で、先生は一日に二クラス教えることになる。

宗教幼稚園　ミネアポリス市には、三百二十五のキリスト教会があり、その中のいくつかゞ、幼稚園を持っている。私は或る時、ドクター・フラーから是非見てくるように、と云われて、アセンションスクールというカトリック系の小中学校に附属している幼稚園を見に行った。此処では、室内のしつらえなど、丁度日本の幼稚園と同じような感じで、子供達は実に楽しそうに、それぞれの仕事をしていた。足の悪いかなりの年の尼さんが先生で、悪い足をひきずりながら、あちこちと歩いて子供をみていた。こゝでも、子供達は静かで、先生の声も殆どきこえず、それでいてよく見ると子供達は楽しそうに明るく仕事をしているのである。此処の尼さんの先生は、近年アメリカの子供達は、たゞ動き廻ること、そして刺戟を受けることばかりしか知らないから自分で創造する力を養いたいのだと私に語っていた。音楽指導で子供にレコードを聞かせて、数人づつ中央に出して自由な、ふりつけをして子供の舞踊を指導していた。それは実に創造的でしかも微妙な興味深いものだった。

私立幼稚園　ミネアポリス市には、宗教以外の私立の学校が少なく、私立の幼稚園は数える程しかない。その中で有名な、ノースロップ・コリージマムという女子の小中高等学校に附属した幼稚園を見学した。此の学校は特に富裕な家庭が多く、子供達のみなりは特にきちんとしていた。先生は昨年大学を出たばかりの若い人で、まだよく馴れず、子供の扱い方もぎごちなく、従って、何となしに、全体の落着きの欠けた感じがしたのである。

さて、ドクター・フラーは私にいろいろの種類の幼稚園を見学する機会を与えてくれたのであるが、私は全体を通じて、やはり幼稚園で一番大切な要素は、先生であることを強く感じたのである。あの幼稚園、此の幼稚園といろいろ思い浮かべてみると、子供達が楽しそうに力一杯仕事をしている所もあるし又それ程でもない所もあるが、それが皆先生の態度とか人柄に関係しているように思われるのである。ドクターフラーとこんな話をした後もう一つ見に行った幼稚園があった。それはヘイスクールという公立小学校に附属した幼稚園だった。比較的中心地に近く、半商店街、半住宅という地域である。こゝは公立学校に附置されているが、普通の教室とは形を

変えて、広い遊戯室に二室小さな室がついたような形にしてある。子供達は広い遊戯室にあちらに一組こちらに一組と、或いは積木をしたり、成いは絵の具で絵をかいているグループと散らばっている。自然に分れたグループの中に、先生が適当にはいっていって、活動を盛んにしている。お話の時間には皆一ケ所に集るのだけれども先生が静かな声で、さあお片附けをしましょう、と一言云ったゞけで、子供達は皆、それぞそのものを片附けて、静かに集まり、すべてが波の動くようによどみなく運ぶのである。けれども又、その裏の先生の心づかいは誠に細かいものである事は、すぐに察せられた。その時に出しておいてよい材料とならない材料とを巧みに使いわけ、そして絶えず子供の上に心を配っていることは、大らかな静かさの中にも見出された。後に聞いたのであるが、この学校は八〇%がユダヤ人であり先生はユダヤ人ではない人が多く、此の先生もユダヤ人ではないのだが父兄達から大へん尊敬されているのだという事を知り、やはりそれだけの事はあると思ったのである。こういう学校では、えてして、人の間の葛藤が起り易い。けれども校長は極めてはっきりと、学校の中には宗教の差を持ち込まず、人間としての扱いをすることを方針として、父兄もこの線を守って、うまくやっている。此の学校の心づかいと先生の人柄とがあって、此の幼稚園が出来ているのだと思った。この幼稚園には、常時ミネソタ大学の幼稚園から実習生を送っている。（註2）

（註一）Foster, J. C. and Mattson, M. L.: Nursery School Education, D. Appleton Century, N. Y. 1939
Foster, J. C. and Headley, E. H.: Education in the Kindergarten, American Book Company, 1936. 2nd rev. Ed. 1948

（注二）アメリカの幼稚園の現況について最もよく書かれている書物は、
National Society for the study of Education, Forty-Sixth Yearbook Part II, Early Childhood Education, 1947

社会と家庭と子供

子供のための教育施設は子供を作るに大切であるけれども、子供を作ってゆくのに、もっと根本的なものは、実は家庭であり、更にその底にある社会なのである。日本人と欧米人とは随分違うし、又日本の子供とアメリカの子供とも違う。その違いを作っているのは家庭の違いであり、社会の違いであり、文化、伝統、風習の違いである。そこでアメリカの子供と、家庭及び社会のことを考察してみよう。

親は子供を個人として、社会の一員としてみている　当り前のことのようであるが、子供は生れた時から既に、独立した個人であり、自分と同等の社会の一員であるという考えは、日本とくらべるとずい分強いように思われる。それが生活の端々に現われる。例えば子供は事情の許す限り、身分一人の専用の部屋を持ち、どんな小さな子でも自分のベットに寝て、自分の品物を好きな様に置いて、自分の勝手になる部屋を一つ持つということは、ぜいたくでもないし

稀なことでもない。それは当然の常識である。勿論そういうことをしてやれるのは経済的に豊かだということもあろうが、随分貧乏な家庭でも、子供に自分の部屋を与えるということは親の責任だと考えているようである。日本では随分経済的に余裕があっても、子供の一人一人に自分の部屋を与えるということはなかなかしないだろう。このことだけでも子供の生活に大きな影響を与える。お誕生の頃には子供は大がい自分の部屋でねかされる。二つ三つになって物心がつく頃には、子供は自分の部屋でねるものと自分できめているし、自分の部屋の中では何でも自分の自由に出来るのだということを心得ている。自分の部屋の外では嫌なことがあっても、うるさいことがあっても、それは自分の部屋から出ている間のことであって部屋に入ればそれは自分の世界である。子供もそう思っているし、親もそう思っている。それでは子供は自由な人格を持った個人だから、親が干渉しないで勝手にさせておくかというと、なかなかそうではない。子供の躾は或る面で非常に厳しい。食事の時の礼儀作法、公園や道路をきれいにしておくこと、人に不快を与えないように気を配ることなど、なかなか厳重にしつけるのである。親は子供を社会の一員として社会に参加出来るように育てる義務を持っているというように考える。それはたゞ単に将来社会に出て食ってゆけるように、というのではなくて、社会の一員として社会に尽してゆけるように、ということなのである。

社会は子供を社会の一員としてみる　家庭が子供を社会の一員としてみると同様に、社会も亦、子供とそれぞれの家の子供として見るよりも、社会の一員として見る。それで、学校や幼稚園から帰ってから後の子供の活動のための社会施設には特に気が配られている。例えば、子供の遊び場としての公園は、ミネアポリス市にだけでも百四十一あり、（人口一人当り一エーカー以上）夏休には公園に指導員がついて、公園の子供の遊びを指導するのである。これには大学で児童教育のことを専攻した人が当り、又大学生が夏休みのアルバイトに喜んでやる仕事である。夏休になると、大きな公園では、子供達を動員して人形芝居を作ることや、水泳の講習というようなことが専門の指導員の指導の下に始まるのである。これも多くの公園を作るだけの土地の余裕があるからでもあるが、やはりそれだけの問題ではないと思う。

近年は特に、子供を社会の手で教育するという傾向が強くなって来た。子供は大きくなるにつれて参加出来る社会集団が増してくる。学校、幼稚園も家庭外の教育機関の一つであるが、それだけでなく、ボーイスカウト、ガールスカウトの活動に活潑で、非常に多くの子供達がこれに参加していろいろの計画を持っているし、又それより更に下の年令の子供達にはカブスカウトの活動が盛である。私の知っている或る家の幼稚園に行っている子供はカブスカウトに属していたが、その母親は毎週十数人の子供達を自分の家に集めて、いろいろの計画を持っていた。更に又方々の教会で互に相競って子供達のための計画をするので、子供達は学校から帰っても、家外の社会活動をする時間が大変増えてきている。勿論、幼稚園の年令ではまだそれ程でもないが、小学校から中学校、高等学校に行くにつれて、日本の子供と比してその社会活動はずっと活潑である。

ミネソタ大学の児童研究所の教授、ミルドレッド、テンプリン(Mildred Templin) が最近子供の遊びの調査をして、これを二十年前のものと比較しているが、それによると、子供達の組織化された社会活動、即ち、ボーイスカウトやH嚊学校の計画などに参加して費す時間が最近著しく多くなっており、逆に組織化されない子供達の遊びは減少している。此の研究事実は前述の事柄を裏付けするものであろう。

さて、子供が社会の一員としての訓練を受けるために、家庭外の社会活動に子供を出す傾向が著しくなると、子供達が家庭の外で費す時間が、非常に多くなり、それが又近年は家庭の悩みの一つになってきている。子供は家庭が教育するものだろうか、それとも社会が教育するものだろうか、という議論が度々なされる。子供が子供達の会合に出て夕食をしたり、友人の家に招ばれたり、又友人を招んだりするのは良いことだが、こう始終では家庭の中の落着いた団欒が保てないじゃないかというのが家庭中心主義の父親の声である年老った人々は云う。我々の時代には、毎日食事の席で親子揃って食前の祈を捧げて団欒し、夜は煖炉を囲んで静かに話し合うのがしきたりだったのに、近頃の子供達は、どこかの会合から夕食の直前にとびこんで来て、食事がすむや否や、又別の会合にとび出してしまう。これでは家庭の影響など子供に与えられないではないかと。日本の社会では、もっと子供達に社会的活動の機会を与えることが必要であるけれども、その際に、家庭の立場を考えて計画をすることが必要であろう。

社会は子供と、人間の生命を大切にする　社会が子供に対して払う心遣いの一つは、道路から子供の生命を守ることである。アメリカの市では、警官を見ることは非常に少なく、朝警官を見るのは大がい学校のわきである。学校のそばの子供の横断する辻々は、巡査が立って子供を渡してくれる。自動車は学校の側では必らず徐行して走るし、電車やバスが止った時には、必らず出入口の手前で停車して、電車やバスが走り出すまで待つ。これは州の法律で定められていることであり、朝夕のどんな混雑時にも厳格に守られる。日本の道路の狭い上に又大きな自動車が、家の軒先をすれ〳〵に全速力でふっとばし、軒先に遊んでいる子供など吹き飛ばされそうに見える。自動車は電車が止った時でもお構いなしに、同じ速力で電車にすれすれに疾走する。これは亦何という対照であろうか。

子供達が一日の勉強と遊びに疲れて夕闇が迫る頃。ミネアポリスの市ではサイレンを鳴らす。子供達に家に帰れという合図である。九時以後に一人で表に出ている十六才以下の子供は、お巡りさんがみつけたら家まで送り届けなければならない。そして多くの子供達は、家に帰れば温い両親の手と、自分のベットが待っている。手足を洗って、父母におやすみなさいのキスをして、めいめい自分の部屋に入ってベットにもぐりこむと、家の中はひっそりとするのである。

社会の相異

幼児の教育のことを考えて、私は人間の住んでいる地盤としての

社会を考えざるを得ない。幼児教育に携わるものも、幼児も、両親も、皆共通の社会の上に住んでいるから、それらすべてが、その地盤としての社会の制約を受けている。日本の幼児教育とアメリカの幼児教育とを比較して考える時に、私には個々の相異点よりも、社会全体としての相異がすべてに反映しているように思えてならないのである。そこで、日本の社会とアメリカの社会の極立った対照をなす特徴を挙げて論じてみようと思う。

安定した社会　日本は古い国だと云い、アメリカは新らしい国だという。いかにも創立以来の年数を比較すれば、アメリカはお話にならない程新らしい国である。況してアメリカの中北部の都市、ミネアポリスと云えば、まだ創立以来百年にしかならない。古い都市東京に住む私供は、これは実に新らしい市であると思う。所が現在の家屋の年数を見ると、百年の歴史しか持たないミネアポリスで、七十年八十年を経た一般家屋は珍らしくなく、建築してから三十年という家は決して古い方ではない。東京では戦前でも三十年前に建った家と云えば、新らしい家ではなかった。況して戦災で三分の二も焼失して多くの家が戦後始めて建った現在、一体どちらの市がより古いと云えるだろうか。家のみでなくいろいろのことで同様の比較が出来る。例えば五十年前の文章は日本ではずい分違う。況して百年前と云えば少し国語学の素養がなければ理解し難いような文章が多い。手紙でも、書物でも。所が英語の文章の場合には、勿論いくらかの変遷はあるけれども、五十年前の文章体は、小説でも手紙でも、役所の公文書でも現代と殆ど同じ体裁である。五十年どころか、百年、二百年、それ以上前の文章でも、現代と殆ど同じ感覚で読めて、日本ほどの変化はない。日本において、明治維新以来の西洋文明の摂取。そして又、目まぐるしい社会の変化は世界にも類を見ないものなのである。こういう変化の激しい日本の社会が、人の心を不安にしている。それに対して、変化を経験しない社会、安定した社会では、親の心も落着き、そして又、子供の心も落着いているのである。

組織立った社会　どこか幼稚園を参観したいと思う時、私は教授に紹介で頼みにゆく。教授は私の希望をきくと、机の上のラジオのような形をした、構内通話機のボタンを押して、隣室のタイピストを呼び出す。通話機を通して私の紹介状を口授する。それから電話の受話機をとり上げてその幼稚園に連絡し、何月何日の何時に私が訪ねてよいか、と問い合はせる。私は帰り際に隣室のタイピストの宅に寄って紹介状を受けとる。その間五分位でこんな簡単なことは万事終りである。すべてが此の調子で、大がいのことは何をするにはどういう手続をふむということがきまっている。そのもっと複雑な社会の組織の中に人間を引きいれて行くことが、教育の大きな使命の一つである。そしてそれぞれの要所の専門家を養成することが専門教育或いは職業教育の機能である。丁度アメリカの都市の道路が整然と区劃されて並び、街路にはすべて名前がつき、各家屋は番号がふってあるように、それから都市と都市をつなぐハイウェイにもすべて番号がついて、全国的にきっかりと組織立ち、その一つ一つの道路が整然と整備されているように、社会全体がきちんと整った

一つの組織なのである。

自信のある社会　日本の社会で学問しようとする時、日本語だけでは用が足りず、どうしても外国語を学んで外国の書物を読まなければならないような気がする。外国語を読み始めると、自分の国の言葉ではないから、理解出来ない所も出来てくるし、時間もかかる。いくら進んでも莫大な量の外国語の書物に目が廻ってしまう。日本語の書物を読んだだけでは、まだ何か他にもっとよいものがある様な気がして、どこまで行っても自信が持てない。所が、現代英語文化の中に住むものにとっては英語の書物に目を通せばそれで事足りるので、心ゆくまでそれらの書物を読めばそれで自信が出来るのである。学者のみならず、実際家にしてもそうである。絶えず新らしい外国語の単語が日本語の中に出てくる。カリキュラム、コアカリキュラム、フラストレーション、レディネス等々、こういう言葉を自分が知らないと不安になる。所が英語文化、英語生活の中ではこういう言葉は何も専門用語としてのみでなく、日常の会話の中にもっとくだけた意味でいくらも使われるものなのである。こういう語を特に勉強しなければ理解出来ないのである。所が英語文化は英語の生活の中から英語の社会の中で生れたものであって、その社会は、日本語の文化日本語の社会とは、いろいろの点で必要性や考え方も違うものなのである。もしも日本語で日本の社会の必要性を満すような方向に皆が努力するなら、社会全体がもっと自信をもって自らを統整するようになるであろう。此の点アメリカは自信のある社会である。

歴史、風土に規定される人間　社会は、歴史と風土に規定されており、人間も又、歴史と風土の影響を知らず知らずの中に受けているように思われる。アメリカの社会それは、つまり無尽蔵な程広大な天然資源の中に人間が移住してそれを切り開きつゝ、拡張した社会である。今から百年前までは、自分で切り開いて耕した土地は自分の所有地になった。そこで自分の手で家を立てたらそれは自分のもので、一国一城の主となることが出来たのである。こうゆう社会の伝統が人間の中に流れているように思われる。それが日常の一寸したことの常識の中にあらわれる。例えば日本では家を建てると云えば、大工に頼んで、隅から隅まで壁紙を張る事から棚をつり、カーテンをかけることまで、やってもらう。アメリカの常識はそうではない。家は自分が建てるものである。だから随分金のある主人でも道具を揃えておいて、家中の壁紙を張ったり洗面所のタイルをはめたり、天井のペンキを塗ったりということは自分でするのが常識である。こういう歴史風土から来る伝統のある社会の中に子供は生れるのであり、その社会に適合する様に子供は育てられ、又育ってゆくのである。特に教育理論の相違を待たずとも、異った社会に育った子供は、異ったように大きくなるのは当然のことである。

日本の幼児教育の課題

此処で私は日本の幼児教育の課題――それは教育全般の問題でもあるが――を提出して、考察してみたいと思う。

多くの人口を持った狭い国土で、幼児教育は何をしたらよいか。

人口が多いと国民生活のいろいろの面にそれが影響するが、流行ということもその一つである。凡そ日本程流行が多く、又それがくるくる変る国はない。というのは、多くの人の云う所であるが、服装は勿論、文章の型、考え方などにも流行がある。これが人口の稠密さと関係があるので、例えば誰かが東京で悪いことをして評判を落すと、北海道から鹿児島の隅まで悪評が伝わってその人は立つ瀬を失ってしまうが、アメリカならば、シカゴで悪いことをしても、ニューヨークやロサンヂュルスにゆけば、全く白紙になって出発することが出来る。同様なことが流行にもあるのである。勿論、これは人口の稠密さだけでなく他のいろいろのことが関係しているのであるが、ともかく、流行すると、その流行が果して妥当なものかどうか、ということを根本的に考えることをしないで、全体が時流に動かされていまう。それでは社会に落着きもなくなり、安定した社会の目標が出来ないのも当然なのである。そして子供はただ、むら気な大人の社会に翻弄されてしまう。最近の幼児教育界に関係のあることに例をとっても、最近の私立小学校の受験熱と、そのためのテスト熱は、いろいろの理由はあるにせよ、流行の一種であろう。私立小学校を受験するために、知能検査を幼稚園の子供が練習するというようなことは、此の数年間の日本の社会独得の現象だろうと思う。

さて、此の人口の多い国、そしてどん〳〵多くなりつゝある国で幼児教育は何を貢献するだろうか。人口の少い国ではお互に必要の上から助け合い協力し合いお互に認め会い、立て合うようになるけれども、人口が多いと、お互に隣の人をおしのけて人より少しでも上に出ようということになる。そしてその結果は人口過剰の弊をます〳〵大きくするのである。限られた土地で、多くの人間が、互に調和して仲よく生活し、円満に社会を運営してゆくことが出来るために、幼児教育は何をしなければならないだろうか。

混乱した社会で、社会は幼児のために何をしたらよいか。

日本の社会は又、近代社会と中世の社会との異様な重なり合いである。東京の道路を歩けばそれが直ちに分る。高く聳えた鉄筋の近代式なビルディングとその蔭にかくれた平家の小さな個人住宅、狭い道路をあたり構わず走りとばす自動車の群、その中を蹌を見て横断する人間、おせんべいや飴玉を並べた小さな駄菓子屋の軒先よりも高い屋根を持った大型バス。個人の生活様式はまだ中世的であり、都会でも人々は情緒的なつながり合いを持ち、社会という単位よりも家の単位の方が個人の生活に大きな力を持っている社会の中に、近代の機械技術文明が無秩序にのさばりこんで来たのである。自らの社会の中から必然性をもって生れ出て来たのでないために、他との調和を破って、これらの近代文化が殊更に横暴になるのである。大型バスのすれ〳〵に通る軒先で遊んでいる幼児、そしてその子供達のために備えられる公園もなく、公園はあっても指導者がなく、そうして混乱した大人の社会に押し出されてゆく子供達のために、社会はもっと考慮しなければならない。

そして、近代と中世、西洋と東洋との間にはさまった日本の社会の問題を解いてゆくのに必要なこと、即ちそれらの複雑な社会の交鎖の中で人間の幸福を先づ第一に持ってくる人間を育てること、そしてそれらの問題を賢明に処理する能力を持った人間を作ること、

が我々の社会の課題であり、日本の幼児教育は、世界にも稀な此の複雑な社会の問題を解くことに貢献しなければならない。

近代文明の極度に進んだ廿世紀後半の世界で幼児教育は何をしたらよいか。

上に述べた様に、日本の社会は自身の中に多くの解決すべき問題を持っているが、又同時に現代の世界の動きの中にあって、世界の他の国々との問題が解決されなければ、同内の問題も解決されないような時代になってきている。廿世紀に入ってからの近代文明の発達は世界史上にも類例のないものであり、飛行機を始め、あらゆる交通機関の発達は世界を日に日に短縮している。今や、世界の隅々までも近代技術の影響を受けぬ所はない。南洋の奥地から北極に至るまで、今まで数千年も殆ど自分達だけで暮していた所が、いやでも応でも他の社会と接触することを余儀なくされている。そこで、全く異った文化が互に接し合い、異った人種が互に接触し合うのである。その準備がないと、種々の誤解やら争いが起って、人種的偏見も出来るし、戦争も起る。表面の一皮をはげば、人間は皮膚の色文化の相異にも拘らず、お互に同じ情を持った人間であることを発見するのに。

廿世紀の後半は世界中の交通がますます繁しくなるだろう。世界の数十億の人々が、欲すると否とに拘らず、今や世界という舞台に押し出されて変化を迫られているのである。その意味で、現代の子供は、その親達の経験しなかった新らしい社会に出てゆくのである。人種と国籍と文化とが世界中に交鎖する。その中で教育は一体何をなすのだろうか。

（お茶の水女子大学講師）

謹賀新年

昭和二十九年一月一日

日本幼稚園協会

◇近刊◇

東京都麻布幼稚園長　鈴木虎秋先生
東京学藝大学講師　角尾稔先生　共著
千葉大学附属幼稚園長　宮内孝先生

幼稚園教育の實際

A5判三五〇頁
クロス装上製本
予価三五〇円

序文……倉橋惣三先生

【内容】幼稚園教育の目的・幼児の成長発達・幼稚園の教育課程・幼稚園に於ける指導・教育内容の指導法・幼稚園の環境

新しい幼稚園教育の在り方と実際について説かれた教育関係者必読の書！

発行所　株式会社　フレーベル館